

保育ソーシャルワークに求められる専門性

—「気になる子」の保育園実態調査より—

高田 さやか

キーワード：気になる行動、発達障がい、親支援、保育ソーシャルワーク

はじめに

2008年2月「新待機児童ゼロ作戦」により、政府は保育所等の待機児童解消をはじめとする保育施設を質・量ともに充実・強化し、推進すること¹を掲げ、2010年閣議決定の「子ども・子育てビジョン」において潜在的な保育ニーズにも対応した保育所の待機児童の解消を目指して、認可保育所だけでなく延長等の保育サービス、病児・病後児保育、認定こども園、放課後児童クラブの2014年度の具体的な目標数値を示した。保育所の質・量の充実・強化として、2012年に通常国会に提出された法案「子ども・子育て新システム」で、多様な保育事業の量的拡大のために質の確保のための客観的な基準を満たすことを要件に①認可外施設を含めて参入を認め、②株式会社、NPO等、多様な事業主体の参入を認めることにより、利用者がニーズに応じて多様な施設や事業を選択できる²とした。

これらの政策を講じたことにより、2004年に24245人いた待機児童が保育所定員を約30万人増加したことによって、2014年には待機児童が21371人とわずかに減少しているものの、少子化に反して保育ニーズが増加していることで、特に首都圏や近畿圏、政令都市や中核都市では待機児童がなかなか解消されない³事態となっている。待機児童を解消し、保護者の多様なニーズ⁴に対応するため、これまでの認可の基準を緩めることで様々な保育施設（以下、保育園とする）を増やし、保護者が選択できるようになった。しかし、女性の就労や様々な労働形態など様々な保育ニーズが存在するため、保育園には虐待やDV、経済的困窮、親の障がい（以下障がいとする）、子ども自身の障がいなど様々な困難や課題を抱えた園児が入所している。

本論文では、保育園（一部幼稚園を含む）で日々の保育のなかで集団生活になじめない、年齢にそぐわない行動から発達障がいの傾向が見られる、といった他の園児とは異なる違和感を保育士として感じる「気になる子」に着目して、保護者対応や多職種との連携、コンサルテーションなど、より専門的な視点をもったソーシャルワーカーが保育士と協働して介入する必要性について考察する。

1. 「気になる子」とは

保育の現場では、「気になる子」という言葉が頻繁に使われるが、そもそも気になる子の定義は曖昧なため、まずは「気になる子」について整理する。

藤永保(2009)は、「気になる子には障がい児と問題児がいて、障がい児では、遺伝や脳の病変のような根深い内在的原因が求められている。問題児では、遺伝や生理的障害は主役ではなく、動機の構造やその発動と抑制のあり方が問われる⁵⁾」と区別したうえで、「気になる子は、障がいといえるほどの明確な兆候はもっていないという意味では、たかだかその周辺部に属する。また、問題がはっきり顕在化していないという意味では問題児予備軍ともいえよう。問題児の大部分は学齢期以降のことだが、気になる子はそれ以前の現象である。問題が微少で曖昧であること、就学前の早い時期に限定されること、このふたつが気になる子の特徴といえる⁶⁾」と定義している。

保育園で「気になる子」の行動は、小学校就学後に徐々に顕著になってくる。それは、周囲の特に大人の捉え方によって障がい児として支えられるのか、問題児として深刻化していくのかに違いがあるとも考えられる。つまり、発達障がいであっても問題行動として捉えられれば問題児として扱われることとなるということである。

また、愛着障がいの特徴と発達障がいとの違いについて岡田尊司(2011)は、「本来の発達障がいとは、遺伝的な要因や胎児期・出産時のトラブルで、発達に問題を生じたものであるが、愛着障がいにもなって生じた発達の問題も、同じように発達障がいとして診断されている。両者を区別するのは、症状からだけでは難しい場合も多い。しかも、ごく幼いころに生じる愛着障がいとは、遺伝的要因と同等以上に、その子のその後の発達に影響を及ぼし得る。愛着パターンは、第2の遺伝子と呼べるほどの支配力をもつのである⁷⁾」としている。

また、愛着障がいにおける対人関係の主な特性は、「ほどよい距離がとれない、些細なストレスに対しても、ネガティブな反応を起こしやすい、ストレスに脆く、うつや心身症になりやすい、非機能的な怒りにとらわれやすい、過去にとらわれたり、過剰反応しやすい、「全か無か」になりやすい、全体より部分にとらわれやすい、意地っ張りでこだわりやすい、発達の問題を生じやすい、発達障がいと診断されることも少なくない、自分を活かすのが下手という特徴がある。他にキャリアの積み方も場当たりの、青年期に躓きやすい、依存しやすく、過食や万引き、子育てに困難を抱えやすい、アイデンティティの問題も生じやすい⁸⁾」などが挙げられる。このように愛着障がいの特性と発達障がいの特性が似ているため、非常に見極めが難しい。

ここでは、発達障がい起因と思われる特徴を中心に保育士の視点から集団生活で違和感を感じる子どもの行動や発達の凹凸を気になる子と捉えることとする。

2. 調査の概要

本調査は、平成24年度帝塚山大学特別研究費に基づいて、2012年4月～2013年3月の間に計10カ所の保育園と幼稚園(1年制)を対象に「気になる子」の実態について聞き取り調査を

実施したものである。直接訪問して保育士から聞き取り、時には観察することで、さらに詳しい状況を把握した。

(1) 調査目的

保育現場では、虐待をはじめ、発達障がい、家庭環境による情緒不安定や知的障がい疑われる等々々な状態の子どもへの支援が迫られているといえます。それらは決してこれまでの保育園の機能だけでは補いきれないものであることから次の点について調査を行った。

県域を越えての調査のため、園の置かれている環境や市独自の取り組みや特徴があることから、まずはそれぞれの園の置かれている状況を整理し、保育所（幼稚園）での「気になる子」の実態を明確にするために聞き取り調査を実施した。

その調査の結果から保育の現場だけにとどまらず専門職が情報交換や対応策を検討するケース会議や地域の社会資源につなぐソーシャルワーカーの役割の必要性について考察する。

(2) 調査内容

保育の現場で保育士が直面している①気になる子の人数②支援に戸惑う、困難だと感じるのは、どのような子どもの行動、言動、場面か③気になる子どもへの支援で成功したもの、その他の支援についてあらかじめ調査依頼し、訪問して保育士から聞きとることとした。

(3) 調査園を取り巻く環境

A市：A私立保育園

政令指定都市で、都市への大規模ベッドタウンとして開発された地域であり、区内の高齢化率は42.8%で、平均年齢46歳（2014年2月末時点）と高齢化が顕著である。市全体の0～14歳の人口13.8%に対してA保育園校区では13.1%とやや市内の平均を下回り、中間層が少ないことがわかる⁹。園の周辺は、都市開発時代に移り住んで高齢化している住人と高齢者と低所得者と外国人が増えつつある公営住宅と再開発の新興住宅が混在する地域である。

B市：B-1公立幼稚園、B-2公立幼稚園、B-3公立幼稚園 B-4公立幼稚園、B-5私立保育園

県中心部から車かバスで30分ほどの距離にある市で、海の埋め立て地に作られた住宅街となっている。出生率、離婚率共に全国一¹⁰で、平成22年の統計になるが、B市の出生率は減少傾向にあるものの18.7%¹¹で、B-1園のある地域は、市内で最も人口と世帯数が多く、B-2園のある地域は市内2番目の人口と世帯の多くなっている。完全失業率が高く、全国平均が4.3%¹²に対し、総計で11.8%、特に男性が13.9%と祖父母の支援を受けている母子家庭が多く、母子家庭で出稼ぎにでている世帯もある。特に男性の就労率低下による経済的課題に直面している家庭が多い。就学前の1年間は小学校に併設されている公立幼稚園に通園するのが一般的で、私立幼稚園は市内に2カ所だけで、保育園も5歳児クラスがあるのはわずかである。近年では、幼稚園の預かり保育の受け入れ数不足から就学まで保育園を選択する人も増えつつある¹³。

C市C-1私立保育園 C-2私立保育園

県中心部からは、車で3時間かかる諸島の中心部にあり、市町村合併で島内では最も広大な面積と人口である。

市独自で5歳児検診を実施していることで、気になる子を園から保健所に挙げておくことで、発達検査などにたどりつくことが可能となっている。また、市の保健師が保育園、幼稚園の巡回も行うことで、親に発達検査などを働きかけるきっかけづくりとなっている。

D市D公立保育園

政令指定都市で、市中心部へのアクセスに便利のため、長屋や工場が次々に新興住宅が建て替えられ、市内一の人口密度となっている。市全体の0～14歳の人口11.3%に対してD保育園の区は12.8%（2014年10月1日現在）¹⁴と子育て世代が利便さを求めて転入しつつある。公立保育園は私立保育園で入園を断られた障がい児や虐待ケース、経済的に困窮している家庭の子どもなど支援を必要としている園児が多く入所している。

(4) 調査の結果

〈表1「気になる子」の行動と支援〉は聞きとり調査の内容である。本調査では、全く異なる地域での聞きとりを行っているため、園児を取り巻く実状は多様であるが、それでも保育士が気になると感じる子に相違がないということがいえる。そして、調査園の多くが、在籍児のおおよそ1割程度を「気になる子」として挙げている。なかでも「指示がとおらない」という意見はどの園にも共通していて、保育士が次の行動を全員に向かって伝えた時に、多くの場合、気になる子は理解できておらずぼんやりしている、指示とは違うことをしている。そのため、毎回、個別にその子が理解できるように伝えなおすことを行っている。月齢の発達の差があるとはいえ、同じ年齢で1人だけ理解できていないのは、保育士があきらかに「おかしい」と気づくポイントであるといえる。

その次に「じっとできない」も多く、動き回っているので、保育士の次の行動の指示を聞いていないことから自分が次に何をすべきか理解できず、活動そのものの参加に支障が出てくる。A園では、動き回っていた男児が、専用の座布団を使うことで、座布団に落ちついて座り、絵本の読み聞かせや保育士の話をきくことができるようになったことは大きな成果といえる。

今回、B市では幼稚園を中心に聞き取り調査を実施したものの「該当なし」と返答があった園がある。幼稚園は保育園と異なり、教育的機能の強いことから、教育と保育の違いから気になる点が異なり、気づきにくいことがあるのではないかとということである。たとえば、B-1幼稚園にて、卒園式の予行練習を見学していると、椅子に座っているもののそわそわと落ち着きがなく足が動き、時々椅子からお尻を浮かせながら、きよろきよろと周囲を見渡している園児が3人ほど見られた。さらに、そのうちの1人の行動を観察していると、標準語で話し、機械類へのこだわり、教員の質問には答えず自分の言いたいことを一方的に話し出していた。この

〈表1 「気になる子」の行動と支援〉

園	入園児数 (定員)	①気になる 子の数	②気になる子の行動	③成功した支援、その他の支援
A	141(130)	13	指示が通らずひとり違う行動をするので止めると「なんで僕ばかり」と言われる	日課を絵カードで示している 今から何をするのかを理解できるように手順を伝える
			排泄の自立が遅い	
			すべての行動に時間がかかる	せかしても変わらないので見守る
			友達とやりとりができず、思い通りにならないと叫ぶ	
			質問に的確に答えられない	
			グループ分けをしているがいつまでたっても自分の属しているグループがどこかわからない	その都度グループに入れている
			ルールが理解できない	その都度声かけを行う
			じつとできない	話をきく場面では、専用の座布団を用意する
			3歳で紙パンツへのこだわりが強く、なかなか排泄の自立ができない	
B-1	93	0	今年度は支援の必要性を感じる子はいなかった	
			4歳だが友達と仲良く遊べず、仲裁に入ると「僕じゃない」と言い、話ができない 言葉の発達が遅れている	
B-2	100	14	視力検査だけが就学前まで一度もできていない	遊びを通して視力検査の練習をしたが、泣いてできなかった
			暴言がひどい	
			極度の人見知り	
			調子がいよ時以外は質問に泣いて答えられなくなる	
			「わからない」と言うにも時間がかかる	
			文字の読み書きがあまりできない	
			話の内容の意味を理解しているかわからない	
			話を聞けない	
			1日中集中力がなく、話し続けている	
			おむつが取れていないまま入園してくる	
情緒不安定だが、他国籍家庭でどう伝えていいのかわからない	他児にその子が困っていることを伝え、トラブルの時にどんな表情をしていたかななどを聞くことで、他児の理解を得る			
B-3	44	0	今年は特にいない	
B-4	62	3	困っていることが言えない	言葉のスキルを教える
			友達とのトラブルを説明できず、周囲に誤解されている	
			保育園では、年下の子と遊んでいたが、同級生だけになると友達と遊べない	

B-5	186(150)	12	1歳児で、集団にとけこめない	
			1歳児でルールが守れない	
			1歳児で絵本を見るべき場面に他のことに気が散って止められない	
			1歳児で感情のコントロールができない。	
			4、5歳児で大人の指示がなくても自分で動ける年齢なのに指示がないと動けない	物の名前とイメージを一致できるように写真を使う
			3歳から青色にこだわりが強く、他児のクレヨンを取り込んでしまっていたり、みんなで使うおもちゃも他の園児が使っていると黙って取り、トラブルになる	クレヨンは、本人に話をしてみんなに返した青色のおもちゃは、「貸して」のやりとりを何度も教えることで、黙って奪うことがなくなり、トラブルが減った
			高いところが好きすぎる	
			力加減がわからない	手を持って友達に呼びかけるときの力加減を伝える
C-1	77(60)	7	声の大きさがわからない	声のボリュームを示す
			1歳でつま先立ち歩きで同じ所をぐるぐる回り、1歳半で耳をふさぐ行為がみられる	保健師に相談する
			一方的な主張ばかりでやりとりができない	
			持ち物の整理ができない	声かけでできるが、声かけがないと手が止まる どこに何を置るか写真を貼っている
			食べ物にこだわりがある	好きな食べ物で工夫しながら嫌いな物も食べられるようにする
			手先を使うことなど苦手なことがはっきりしている	
			自ら訴えができない	1対1で過ごす時間を多くもち、一つ何かする度に話しかける。その子の行動に対して「〇〇したね」「〇〇できたね」「それ楽しいね」「〇〇したいね」などその子の気持ちを代弁するような話しかけをするうちに、本人の口から少しずつ感情を表す言葉が出始める
			保育士の指示が通っているのかどうか、反応がなくてわからない	物の始末や生活習慣に必要なことを保育士も一緒にすることで習慣化する
			次の活動に移るときに周りのことが気になり目がいってしまい、行動できずにいる	視聴覚教材をできるだけ活用した
			何がしたいか、どうしてほしいか、というときに選択できるようにしても意思表示できない	
			一斉活動のときに走り回って落ち着かず、周囲の園児も巻き込んでしまう	

C-2	53(45)	5	指示が一度では通らない	絵カードを使う
			次の見通しが見つからない	声かけを増やす
			一人遊びが好き	
			必要以上に動き回る	手を握って話をする
			突然、叩く、蹴る、突き飛ばす	叩く、蹴る、突き飛ばすのを止めた後、手を握って話をする 絵カードを使ってみるが難しい
			静かにするべき場面で大声を出す	
			こだわりが強い	
			保育士の話が聞けない	制作などは個別に対応する
			好きな絵本以外の集団の場面は、どこかに行ってしまう	
			落ち着きがない	
			長い指示が理解できない	短い指示で伝え直す
			2歳ぐらいから他の子との違いを何となく感じる。	
			視線が合わない	
			4歳でヒーローの名前が言えない	
			人見知りせず、知らないひとにもべったりくっついていく	
2歳で4、5歳程度の言葉が豊富で、アンバランス				
その都度怒って泣き叫びながら指しゃぶりを するが理由がつかめない				
集団生活が難しい				
切り替えができない				
D	123	7	少しの変更や変化に弱い	コミュニケーションボードを使用 5歳児になると1週間分の予定を絵カードで貼る
			すぐに手が出る	
			こだわりが強い	
			暴言をすぐに吐くので、友達との関係がうまく築けない	
			トラブルが多く、安定した園生活ができない	
			3歳なのに言葉が出ない	
			いつもと違う日の流れについていけない	

ことから A そもそも違和感を抱く基準が異なるのではないかと、とも考えることができる。幼稚園では、就園まで家庭で育った園児のなかには排泄の自立ができておらずオムツ着用、ひとりで着替えができないなどの基本的な生活習慣の支援が優先されてしまうことや障がいと認定されて加配のついた園児の話が多く出た。どちらかといえば、手をかけなければならぬ子の方が気になっているといえる。その証拠に「該当なし」とした幼稚園と同じ地域の B-5 保育園での調査では、気になる子の数や相談が多く出たことから見逃している可能性が高いと言える。

また、就学前の1年間を預かる幼稚園からすると、子どもの気になることがあっても信頼関

係が築けておらず、話を切り出すことが難しいという意見が多かった。この用地域は、プレスクールという考え方が浸透した地域だが、気になる子にとっては、就学前に教育を受ける体験をすることはメリットでもある反面、保育園や家庭から幼稚園、小学校とめまぐるしく変わる環境に慣れないことから混乱するデメリットも考えられる。

保育士からみると発達障がい疑われるものの、はっきりと確信が持てない園児についての対応に困ることも多いという意見も聞かれた。家庭環境によるものなのか、ネグレクトが隠れているのか、保護者と同じ傾向の特性のため、性格と捉えるべきか、おっとりしていて行動がゆっくりといったその園児自身の性格と捉えるべきなのかといった見極めが難しい。

また、明らかに発達障がいの症状を示しているので、発達検査を勧めたいが、どのように話をすれば保護者が気になる行動を認識して、受け入れられるのか、発達検査などの次のステップへの話をどのように切り出せるかが難しいという困り感も多かった。

保育園としては、発達障がいの疑いだけで診断が下りていない状態では、保育士の加配がなく、「気になる子」のパニックや他児とのトラブル、個別対応などの対応に追われることを避けるために、早期発見からの適切な支援につなげることで、子どもたちが快適に保育園で過ごせることを望んでいることがわかった。

効果的な支援については、写真や絵カードを利用した視覚支援が最も多く取り入れられ、事前のスケジュール表示が試みられている。しかし、見てほしい気になる子は見ておらず、他の園児が見ているようで大きな効果は得られない。保育室を見ると、壁面や掲示物がある壁に挟まれた黒板の角に小さく絵カードが貼ってある、可動式のホワイトボードに貼られているが、保育室全体に様々な壁面や作品などが飾られていて、保育士が見てほしい「気になる子」にはスケジュールボードの存在に気づきにくい状態といえる支援がみられた。

3. 保育ソーシャルワークに求められる専門性

保育ソーシャルワークについて、保育所保育指針第6章1保育所における保護者に対する支援の基本(5)「子育て等に関する相談や助言に当たっては、保護者の気持ちを受け止め、相互の信頼関係を基本に、保護者一人一人の自己決定を尊重すること。保育所においては、子育て等に関する相談や助言など、子育て支援のため、保育士や他の専門性を有する職員が相応にソーシャルワーク機能を果たすことも必要となります。その機能は、現状としては主として保育士が担うこととなります。ただし、保育所や保育士はソーシャルワークを中心的に担う専門機関や専門職ではないことに留意し、ソーシャルワークの原理(態度)、知識、技術等への理解を深めた上で、援助を展開することが必要です¹⁵⁾。」と明記されている。つまり、保育士がソーシャルワークの専門職でないことに留意しながら、保護者に対して子育て相談や助言に当たることとされているが、保護者に助言する際に、専門職の見立て、プロセスについての助言があることで、保育士が最も苦慮している「気になる子」の行動を保護者が受け止め、適切な支援へ

と発展させることができるのではないかとと思われる。

おわりに

保育園では、保育士が「気になる子」の行動の対応に日々追われながらも集団生活を送れるようにと様々な工夫を試みている。聞きとり調査のなかでも砂時計を活用している話が出てきたが、その砂時計を応用する方法を具体的に提案することで、ソーシャルワーカーとして保育士とは異なる見立てができることを示すことができた。このように、保育園が様々な専門機関や専門職とつながることで、少し違った視点から助言を受け、「気になる子」にも保護者に対しても新たな支援へとつながる可能性も増える。

学校におけるスクールソーシャルワーカーだけでなく、早期の課題解決を目的に保育園にもソーシャルワーカーの配置が必要で、「気になる子」にとっても過ごしやすい環境となることを願う。

[注]

- 1 内閣府 2012 「平成 24 年版子ども・子育て白書」勝美印刷 p 6
- 2 内閣府 2012 同上 p 21
- 3 厚生労働省 「保育所関連状況取りまとめ（平成 26 年 4 月 1 日）」
- 4 保育ニーズが大きく変容していることから、柏女 2013 は、最近の保育ニーズの特徴として
 - (1) 保育所を利用する子どもと保護者が多様になったこと
 - (2) 保育所保育を希望する保護者が急増している一方で、過疎地においては少子化の影響も深刻なこと
 - (3) 保育所に対する期待の幅が、地域の一般の子育て家庭にまで広がってきていること
 - (4) 利用者のニーズの多様化とともに、保育所保育に多様な意見や要望になってきたこと
 - (5) 子育てや子育ての様相が変化し、生きた体験や生活の知恵などが保育のなかで求められるようになり、また、幼児期の教育の振興が世界的潮流となってきたことを挙げている 柏女霊峰 2013 「子ども家庭福祉論第 3 版」誠信書房 p 137
- 5 藤永保 2009 「気になる子」にどう向き合うか」フレーベル館 p 42
- 6 藤永保 2009 同上 p 44
- 7 岡田尊司 2011 「愛着障害 子ども時代を引きずる人々」光文社 p 138
- 8 岡田尊司 2011 同上 p 120～153
- 9 堺市 HP 全市・区域別年齢別人口 過去の全市・区域別年齢別人口
総務省統計局の人口推計によると、2013 年 2 月 1 日時点の全国の 0～14 歳は 13.0%、65 歳以上は 24.5% である。
- 10 総務省統計局 2014 「社会生活統計指標 都道府県の指標 2014」日本統計協会
2013 年 2～18 都道府県別出生・死亡数と婚姻・離婚件数によると全国平均の人口 1000 人あたりの出生率

8.2%、離婚率1.87に対してB県は、出生率12.2%、離婚率2.59%である。

11 総務省統計局 労働力調査2013年I-A-第13表 年齢階級別完全失業者数及び完全失業率

12 糸満市 平成23年版統計いとまん2.人口・労働力25年齢階層別人口

13 B-1~4公立幼稚園があるB県(以下、B県とする)では、2012年5月1日公立幼稚園在園者数が13467人、私立幼稚園と合わせると17723人と公立幼稚園が多いことがわかる。それに対して、A私立保育園、D公立保育所のあるAD県(以下、AD県とする)は、公立幼稚園25076人、幼稚園在園者120743人と私立幼稚園在園者が多いことがわかる。なお、C-1~2私立保育園のあるC県(以下、C県とする)では公立幼稚園在園者数は、2304人、幼稚園在園者16609人である。

保育所修了者数を比較すると2011年度B県は3265人、C県8966人 AD県24819人に対し、2012年5月1日の小学校児童数(第一学年児童数)は、B県16076人、C県15810人、AD県72921人となっている。このことから保育所利用率は、B県の約20%、C県約57%、AD県約34%である。総務省統計局2014同上 E教育4)児童・生徒・学生数p292~295 5)保育所修了者数、義務教育前教育p300~301

14 大阪市HP 2013年2月1日現在 年齢別推計人口

15 厚生労働省編2013「保育所保育指針解説書」フレーベル館p184

【参考文献】

岡田尊司(2011)「愛着障害 子ども時代を引きずる人々」光文社

柏女霊峰2013「子ども家庭福祉論第3版」誠信書房

柏女霊峰 橋本真紀2010「保育者の保育相談支援—保育相談支援の原理と技術」フレーベル館

柏女霊峰 山縣文治2003「保育・看護・福祉プリマーズ④家族援助論」ミネルヴァ書房

厚生労働省編2013「保育所保育指針解説書」フレーベル館

総務省統計局2014「社会生活統計指標 都道府県の指標2014」日本統計協会

鶴宏史2009「保育ソーシャルワーク論社会福祉専門職としてのアイデンティティ」あいり出版

内閣府2012「平成24年版子ども・子育て白書」勝美印刷

藤永保2009「『気になる子』にどう向き合うか」フレーベル館

天草市次世代育成支援後期行動計画平成22年3月天草市

糸満市HP 糸満市の人口(平成25年以前)平成24年度糸満市月別人口調べ(平成24年4月末~平成25年3月)

<http://www.city.itoman.lg.jp/docs/2013050700040/#24>

平成23年度版 統計いとまん

<http://www.city.itoman.lg.jp/docs/2013020102805/> (2015年3月6日アクセス)

大阪市HP 2013年2月1日現在 年齢別推計人口

<http://www.city.osaka.lg.jp/toshikeikaku/page/0000014987.html> (2015年2月20日アクセス)

厚生労働省HP「保育所関連状況取りまとめ(平成26年4月1日)」

高田：保育ソーシャルワークに求められる専門性

www.mhlw.go.jp/...oukateikyoku-Hoikuka/0000057778.pdf (2015年3月17日アクセス)

堺市 HP 全市・区域別年齢別人口 過去の全市・区域別年齢別人口
<http://www.city.sakai.lg.jp/shisei/tokei/nenreibetsu/zensikunenrei.html> (2015年2月20日アクセス)

総務省統計局 HP 労働力調査2013年

<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001119262> (2015年3月6日アクセス)